

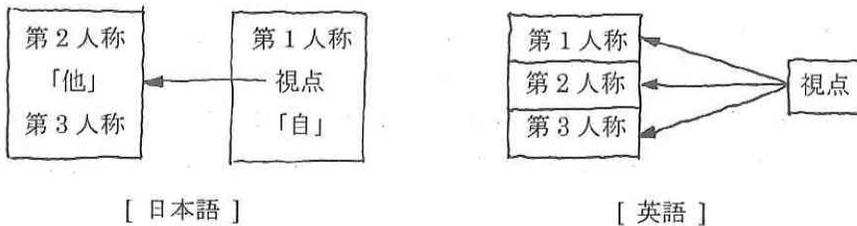
この論文は、場面と視点のあり方が言語表現にどのように反映するものであるかについて、いくつかの具体的な言語現象を取り上げて考察するものである。

1. 主観的視点と客観的視点

よく知られているように、心理動詞や感覚形容詞の用法に関して、日本語と英語にははっきりした違いが見られる。

- | | |
|---------------------|-----------------|
| (1a) I think... | (1b) 私は…と思う。 |
| (2a) You think... | (2b) *あなたは…と思う。 |
| (3a) She thinks... | (3b) *彼女は…と思う。 |
| (4a) I am happy. | (4b) 私は嬉しい。 |
| (5a) You are happy. | (5b) *あなたは嬉しい。 |
| (6a) He is happy. | (6b) *彼は嬉しい。 |

この現象は、言語表現をするときの話者の心理的視点の位置が日英語で異なると考えることによって説明される。英語では視点がすべての人称の外側にあり、その客観的視点から3つの人称が平等に眺められているので、述語の語形がすべて同じであるのだと考えられる。それに対して、日本語では、視点は主観的であって話者の内部にあり、その視点から第2人称と第3人称を眺めるという形になっていると考えられる。つまり日本語では「自(第1人称)対「他(第2人称・第3人称)」という対立が裏にあるわけである。図示すれば次の様になる。



他者の心理や感覚は話者には分からないので、話者に使われるのと同じ語形を他者に使うわけにはいかない。他者の心理や感覚は外に現れた徴候あるいは他者自身の報告に基づいて推定せざるを得ない。したがって他者については「…と思っている」、「…は嬉しそうだ」、「…は嬉しがっている」、「…は嬉しいのだ」のような客観的な表現形式を使うこと

になる。「ている」という形は、あとで述べるように、話者をも客観視する「現場視点」を含む語形である。

Langacker (1990:ch. 12. Subjectification) や池上嘉彦(2000:第3部)にも論じられているが、視点が話者の内部にあると自分は意識されなくなり、言語表現化もされなくなる。逆に英語では話者の存在が客観的に意識されているために、第1人称およびその同類としての第2人称・第3人称つまり人間主語が現れることになる。これは言語表現のレベルで見ると、ある状況を描写するのに、英語では「人間がある状況を知覚している」という形を取るのに対して、日本語では人間は表面から消え、状況の描写だけが残るということになる。よく引かれる典型的な例でいうと、英語で “Where are we?” と言うところを日本語では「ここはどこですか」と言う。

英語表現が客観的視点に基づいていることは、英語における再帰表現の発達(例: I enjoyed myself.)、心理状態を受動態で表現すること(例: I am pleased to meet you.)、独り言を言うときあるいは心の中で語るときに自分に対して第2人称あるいは第3人称で呼びかけることが多いことなどによっても裏付けられる。

2. 「2千文」による主観的・客観的視点の相違の例証

日本語の主観的視点(状況描写)、英語の客観的視点(人間中心描写)の対立を裏付ける証拠として、Frei (1953)『フランス語2千文』に基づく日本語版 Frei (1971) とイギリス英語版 Bennet (1972) を比べてみよう。Frei (1953) はフランス語の基本的な文型・語彙・表現を 2000 個の文あるいは対話によって総合的に示そうとしたものである。以下にフランス語原文 / 英語訳 / 日本語訳の順に並べて示す。

- (1) Le pain n'est pas encore venu. (パンがまだ来ていない) / We haven't got any bread yet. / パンがまだ出ていない。 [Frei, No. 197]
- (2) J'ai changé d'adresse. (私は住所を変えました) / I've moved. / 住所が変わりました。 [Frei, No. 377]
- (3) Ceci entre nous! (これは我々のあいだだけだよ) / This is between you and me. / これはここだけの話だよ。 [Frei, No. 896]
- (4) *A un garçon*: On ne tient pas sa fourchette comme ça! (男の子に: 人はフォークをそんなふうには持たない) / *To a boy*: You shouldn't hold your fork like that! / おはしの持ち方が違うよ。 [Frei, No. 180]
- (5) *A ce dîner*: On nous a servi du poulet. (ディナーで: 人は私たちに鶏肉を出してくれた) / They gave us chicken. / 今晚のごちそうは鶏肉だった。 [Frei, No. 191]
- (6) J'aime mieux manger ça avec des pomme de terre. (私はこれはジャガイモと一緒に食べる方が好きだ) / I prefer that with potatoes. / これはジャガイモと食べたほうがいいよ。 [Frei, No. 195]

- (7) *Au magasin: J'aimerais acheter quelques cigares.* (店で: 私は葉巻を買いたいのです) / *At the shop: I'd like a few cigars.* / [タバコ屋] 葉巻ありますか。 [Frei, No. 240]

3. 同一文中での視点の切り換え

日本語の表現では、客観的視点で始まった文が途中で主観的視点に切り換わることがあり、それが日本語表現の一つの特徴をなしている。

- (1) その角を曲がると、バス停があります。

この文の前半「その角を曲がると」は人間主語文つまり客観的視点による表現であるが、後半の「バス停があります」は状況描写つまり主観的視点による表現である。これは単に日本語表現の特色としてそのまま受け入れるべきではなく、本来は後半も人間主語表現で通すべきものが、日本語表現の主要な特徴である主観的視点性の圧力によってそちらにねじ曲げられた変則的な (anomalous) 場合と見るべきものである。つまり後半を「バス停が見えます」のように人間が知覚するという形にしなければならないものである。そうすることによって途中の接続助詞「と」の本来の機能が初めて生きてくる。この「と」の基本的機能は〈二つの出来事が時間的に相前後して生じることを表わす〉のであり、「角を曲がれば見える」ということである。「角を曲がればある」では「と」の用法の説明がつかないことになる(この「と」の用法について詳しくは国広、1982a : 268 以下を参照)。実際に「と」の前後に人間行動を表現している实例は少なくない。

- (2) 発展途上国の農村を回っていると不思議なことに気が付く。(石 弘之「地球環境報告」)
(3) 欧米の都市で道路を歩いていると、路ばたに大きなゴミ箱のような鉄の箱が置いてあるのを見かけることがある。(深田祐介「新・新東洋事情」)
(4) 現場付近の路地に近づくと、石をハンマーで打つ甲高い響きが聞こえてきた。街路の角を曲がると、男たちが二人一組になって作業をしている光景が見えた。(「司馬遼太郎の風景」⑤NHK スペシャル「オランダ紀行」)

ここで思い合わされるのは、例(1)と同じ表現型に属する川端康成『雪国』の冒頭の文である。

- (5) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

池上嘉彦(2000 : 290-293) でもこの表現が取り上げられているが、そこではこの表現は〈主客合体〉したものと説明されている。筆者はこれを視点切り換えの表現と見たい。つ

まり「雪国であった」は「雪国が見えてきた」などの知覚表現を省略した結果、客観的視点が主観的視点に切り換えられてしまった表現であるということである。

用例(1)(5)群と(2)(3)(4)群とでは表現構造が大きく異なるわけであるが、国語辞典の中にはこの点に気付かず、接続助詞「に」の項にこの『雪国』の冒頭文を用例として挙げているものが少なくとも2種類ある。この文は、後半が省略文であることを言わない限り他の(2)(3)(4)などの文と同列に扱うことはできない。この冒頭文の主語は何であるかはっきりしないという意見を見ることがあるが、この文が人間の知覚表現を省略したものであることに気が付けば、列車の窓から雪国を見た人が主語であることが分かる。「雪国であった」の部分だけを眺めていたのでは何が主語であるかは分からない。

3.1 認知主体表現の省略

接続助詞「と」がからんでいない場合もあるけれども、知覚ないし認知主体の表現を省略したために、表面的には何が主語が分からなくなっている表現は少なくない。次の例では、参考のために省略されたと考えられる認知主体表現の一例を [] に入れて示す。

- (1) 日本でも阪神大震災の時には、「画期的」といえるほどたくさんの数のボランティアが活動したようだが、エリートコースに乗っている人の参加の比率は少なかったという。
[そこで目に映ってくるのは] 良家の子弟が平和部隊の隊員として二年間ぐらいアフリカに行ってくる、というアメリカとの差である。(松山幸雄「ビフテキと茶碗蒸し」)
- (2) コック長は、毛沢東主席が四川省にきたときに料理番をしたというひとである。食って見ると、[そこで私が知覚したのは] 口中にひびくような唐辛子がらさである。(司馬遼太郎「街道をゆく 第二十巻 中国・蜀と雲南のみち」)
- (3) 何等でもいいというなら事は簡単だが、最高の勲一等をもらうとなると [そこに我々が見るのは] 大変な競争である。(朝日新聞「天声人語」、1981.11.3)
- (4) 「それにしても、国中が三連休なんていうと、[我々が経験するのは] どこへ行っても大混雑と渋滞でしょう」(朝日新聞「天声人語」、1993.11.8)

4. 視点の移動

ここでいう視点は直示(deixis)の基準としての視点のことであり、これを「直示視点」と呼ぶならば、上で論じてきた主観的・客観的の区別をする場合の視点は表現視点と呼んで区別される。直示基準は空間的には話者のいるところおよび話者の向いている方向であり、時間的には発話時である。いまは空間的直示の場合のみに限るが、日本語では空間的直示の基準視点はつねに話者にある。指示詞の「そ」系列の語の基準は直接には聴者であるが、聴者は話者を基準にした二次的なものであるので、基本的には話者が基準であるとしてよい。話者以外の人や物に視点を移す場合は「…の」という限定を必要とする。ところが英語では、相手の質問や要請に答えるという限られた場面では、視点を聴者側に移すと

いう用法が見られる。

筆者がこの用法に最初に気付いたのは、1983年にサンフランシスコの‘Pier 39’という、桟橋の上にたくさんの店が並んでいる所に行った時である。‘Shirtique’という看板の掛かった、Tシャツに文字や絵を焼き付けて売る店にはいった。あるお客が焼きつけてもらう位置についていろいろと注文を出していた。だいたい決まったところで店の人が言った。“How about there?” 店員は自分が手で押さえているところを指して‘there’と言ったのである。日本語では「このへんでどうですか」と「こ」の系列語しか使えない。この‘there’の用法は、視点を相手方に移したものとしか考えられない。これがきっかけとなって以前に出会った似たような用法が思い出されてきた。アメリカの床屋さんが理髪の上を客に尋ねるときに“How do you like that?”というのもその一例である。その後アメリカの漫画で次の様な類例に接した。これは当時『言語』(大修館書店)に連載中の「マンガの言語学」で取り上げたので(1985年11月号色ページ)、原画についてはそちらを見て頂きたいが、言葉の部分は次の様である。

- [駒1] ある簡易食堂のマダムが何か自分が特別に作った料理をスプーンに載せて常連客の一人 WELDON の口元に運びながら言う：HERE, WELDON, SEE WHAT DO YOU THINK OF THIS. (ほらウエルダン、これどう思う?)
- [駒2] Weldon は顔をしかめながら言う：YOU CALL THAT CHILI?! (これがチリ料理といえるかい?)
- [駒3] マダムが慥然とした表情で言う：I WAS ASKIN' YOU. (私が聞いているのよ)

ウエルダンは自分の口の中にある食物を指して‘THAT’を使っている。(ゴチックは原画)。これも味見をしてくれという相手の要望に答える場面であるので、視点を移したものと理解される。

ところで、少なくとも共通日本語では不可能な視点移動が英語ではなぜ可能なのであろうか。現時点で考えられる理由は、英語の表現視点が客観的なものであって、特にどれかの人称と結び付いたものではないから、移動させ易いのだということである。

5. 二重視点

英語では複数の人間がある目的地に向かって移動していて、その目的地の近くに来た時に、“We're almost there.”(もう直ぐです)と言う。事例を一つだけ示しておこう。

- (1) “I'm really getting chilly, darling,” she said. “Let's go back now.” He turned to look at her. “We're almost there, Cathy.” (Sidney Sheldon, *The Other Side of Midnight*) (「あなた、私ほんとに寒くなってきたわ。もう引返しましょうよ」彼は

彼女の方を向いて言った。「キャッシーもう直ぐそこだよ」

この用法では、‘we’に含まれている‘here’と同一文中の‘there’とが矛盾しているように見える。これはどう解釈したらいいか。一つの解釈は、二つの視点が同時に存在する「二重視点」の現象だと見ることである。つまり自分たちが常に持っている視点と出発点に残してきた視点である。その出発点から見た時の‘there’に今近づいたと言っていると考えerわけである。これも英語では視点と話者との結び付きがゆるいことからくる現象であると言えよう。

6. 語義の直示的意味派生

語用論や認知意味論の分野では、「いま・ここ・みぎ」などの直示語の意味定義には直示的基準つまり発話の時点、話者のいる位置あるいは向いている方向を持ち込むことが不可欠であることは自明であると思われるが、伝統的な国語辞典の記述ではそういう考え方がまだ浸透しておらず、辞典編集者たちは直示語の定義に苦勞してきたように見うけられる。例えば「いま」という語は〈話者が「いま」と言ったその時点（を含む時間帯）〉を指すが、『岩波国語辞典第六版』（2000年）は「過去とも未来とも言えない時」という間接的な描写に終わっている。『日本国語大辞典第二版』（小学館、2000年）も同様である。直示的基準を持ち込んだおそらく唯一の国語辞典は『大辞林』（初版も第二版も同様）で、「話し手が話をしている時点」と記述している。これも厳密には「話をしている」では不十分であり、「「いま」と言った時点」としなければならない。「みぎ・ひだり」の指す方向はその語の発話者が発話時に向いている方向が基準になって決まるが（cf. 国広、1997: 166-168）、そういう直示基準を明示した国語辞典としては、「人体を座標軸にしている。」と記述した『日本国語大辞典初版』だけではないだろうか。

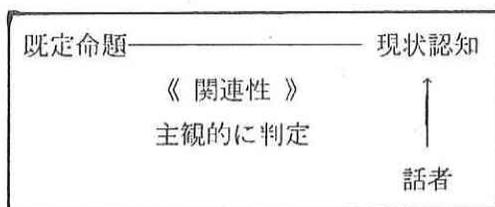
英語の形容詞‘contemporary, current, present’は共に〈現代の、現在の〉などの発話時を含む時間帯を指す直示的な意味を発達させているが、いずれも原義では現在時とは関係がなかった。‘contemporary’は〈時代を同じくする〉であって過去についても用いられ、‘current’は〈流れている〉から〈世間に広く流通している〉を発達させ、これも現時点とは関係がなかった。‘present’は〈存在している〉が原義で、それはいつの時代でもよかった。そういう非直示的な意味から〈現代の〉という直示の意味が生じた過程は、かりに「語用論の基本原則」と呼ぶ心の働きによるものと説明できる。この原則は、発話の意味は、「場面・文脈により特に制約されない限り（デフォルト値として）、時間的な意味は発話時に結び付けられ、空間的な意味は発話者のいる位置に結び付けられる」というものである（cf. 国広、1982b: 4）。例えば「あ痛！」という叫び声は、そう叫んだ時に痛みを感じていることを表わす。‘contemporary’が書名として用いられる時は、〈現代の〉という直示の意味で用いられるのが普通であるが、それは書名という場面が時間的には何の制約も受けていないためであると考えられる。

7. 語の基本義の中に組み込まれた「場面」

7.1 「のだ」

- (1) この戸はあきません。
- (2) この戸はあかないんです。

用例 (2) のような「のだ」を含む表現についてはいままでに多くの研究がなされてきたが、「のだ」の基本的機能については筆者自身一応の結論に達したと考えている（三上、1972；国広、1984、1992；田野村、1990；佐治、1991、1999；菊地、2000）。その結論は国広(1992：19 - 20)に次のように示している。



「のだ」の機能図

ある現状を認知するという主体的行動を行ない、それと関連があると“主観的に判定される”既定命題を「のだ」の前に提示するということである。[中略] さらにこの既定命題も主観的にそう認められるものであることに特に注意をうながしておきたい。

上に示した用例に基づいて説明すると、(1)はその場の状況に関係なく発することができるが、(2)は何らかの現状認知が先行しないと使えない。そばにいる別の人がその戸を一所懸命にあけようとしているとか、状況からしてその戸をあけるべきなのにあけずにいるというような状況である。ここで重要なのは、そういう現状を相手の人も認知していなければならないということである。上図とその解説にはその点が含まれていないので、ここで追加しておく。聴者が現状認知をしていない時に「のだ」文を用いると、聴者はなぜ「のだ」文が用いられたのか理解に苦しむことになる。用例の中の戸が何らかの事情であかなくなっていることを「既定命題」と呼ぶ。既定命題は話者だけが承知していることであり、それを聴者に提供するのが「のだ」文である。これは事の性質上現状の説明になることが多いが、それだけではなく、実にさまざまな表面的な意味を伝える。その詳細については国広(1992：17 - 19)を参照されたい。以上に明らかなように、「のだ」の基本義では、場面情報が重要な要素となっている。

Sweetser・澤田治美(2000)の「訳者まえがき」において澤田はSweetserの唱える「現実世

界領域・認識領域・言語行為領域」の区別に触れ、前者二つの具体例として次を示している (p.v)。

- (3) John came back because he loved her. (ジョンは彼女を愛していたので帰ってきた) (現実世界領域)
- (4) John loved her, because he came back. (ジョンは彼女を愛していたのだ、というのは、彼は帰ってきたからだ) (認識領域)

現実世界では、'John loved her' が原因で、'John came back' という結果が生じるのであるが、認識領域では 'John came back' という現状認知に基づいて 'John loved her' という既定命題を理由として認識して提示するという方向を取っている。そのために日本語では「のだ」が出てくるわけである。このことを指して澤田は「文の意味が認識領域に属することが、日本語では「のだ」でマークされることがある。」(p. vi) と述べている。同じ 'John came back' が現実世界では結果になり、認識の世界では判断の理由になるという、方向関係が逆になる事情を Sweetser 説は見事に説明してくれる。

7.2 Stage-level Predicate

Carlson (1977) 以来 Diesing, Kratzer などによって述語の 'individual-level' (個人レベル) と 'stage-level' (舞台レベル) の違いとシンタクスとの関係に注意が向けられるようになった。個人レベルというのは、'He is intelligent.' のように特定の時間・空間とは関係なく、いつでも発話しても成立する述語を言い、舞台レベルというのは、'He is available.' (彼はいま手が空いている) のように、特定の時間帯に限って成立する述語、'The tower is visible.' (その塔は見える) のように、特定の時間と場所に限って成立する述語のことである。舞台レベルの述語はこのように、場面と密接に結び付いている。この2種類の述語についての考え方は論者によって多少捉え方にずれがあるようであるが、次に示す Kratzer の考え方は場面との結び付きをはっきりと示している。

I will propose that stage-level predicates are 'Davidsonian' in that they have an extra argument position for events or spatiotemporal location (Davidson, 1967).

Individual-level predicates lack this position. (Kratzer, 1989: 2)

(私の意見を述べると、舞台レベルの述語は出来事や時間・空間的な位置のための余分の項位置を持っているという意味で「デイヴィッドソンの」であるということである。個人レベルの述語にはこの項位置が欠けている。)

7.3 未完了アスペクトに含まれる現場視点性

日本語の「ている」は〈完了〉と〈未完了〉の二通りのアスペクトを指すが、その未完

了の方および英語の 'be doing' という未完了アスペクト形は〈その発話者が現場にいて出来事の観察報告をする〉という要素を含んでいると考えられる。これを「現場視点性」と呼ぶことにする。

(1) He was sleeping when I entered his room. (部屋にはいったら、彼は眠っていた。)

用例(1)に見られるように、これは発話者が現場に行った時に観察したことを報告するという意味を裏に含んでいる。'when I entered his room' は、現場に行ったことを明示している。

(2) She was reading all by herself. (彼女はただ一人で本を読んでいた。)

この場合、観察報告者は実際にはいないけれども、これはフィクションなどに見られるもので、実は作者が omnipresent な観察者の役割を演じているのである。

(3) I was taking a nap when someone knocked on the door. (ドアを誰かがノックした時私は居眠りをしていた。)

この場合、発話者は自分の居眠りを観察できるはずはないのであるが、これは発話者が目覚めたあとで過去を振り返り、推定的に自分の行動を報告しているものと考えられる。以上のような諸用法を通して言えることは、主語が第1人称である場合も含めて、発話者が“客観的に”ある出来事を観察して報告する表現形式であるということである。この現場視点性は言うまでもなく、場面というものを考慮に入れた時初めて成立するものである。

未完了アスペクトの意味は〈未完了の連続的出来事〉と〈限定された時間帯〉という要素からなると一般に言われている(cf. Twaddell, 1965; Quirk et al., § 4.25)。この限定された時間帯という要素は、拙見によれば、現場視点性から派生したものと考えられる。生身の人間が対象のすぐそばで観察しているのであるから、当然観察の空間も時間も制約を受ける。'Waves were beating on the shore.' (波が岸边に寄せては返していた。) という時、いずれは終るという含みはないと思われる。これは観察者が見ていた間はやまなかつたということであり、限定時間 (limited duration) という要素はけっして本質的なものではないと考えられる。

ここで思い合わされるのは、細江逸記の未完了アスペクトに対する「集注叙述」説である。細江は次のように述べている。

尚一つ他の稍詩的な比較を取つて私の信ずるところを説明すれば Perfect は“see”す

る語形であり、Imperfectは“look”する語形であり、Expanded Formsは“watch”する語形であると言つて差支えない。所詮、此語形の本義は欧米の学者の多くが説く如く時の姿や動作又は状態の客観的な性質の中に求められるべきものにはあらずして、或事柄を如実に認識(回想、又は予想)して、且、暫し熱心に心をそこに留めて陳述するものである(細江、1932: 111-112)。[国広注：ここでいう Imperfect は ‘He waited until she came.’ のような場合を指す]

ここで細江が未完了アスペクトは ‘watch’ する語形であると述べている点に注目したい。これは細江は「注意集中」形であることを言うために用いたのであろうが、現場視点という捉え方を得た我々の立場から見れば、‘watch’ はまさに現場視点のことを指しているものと言うことができる。

Kratzer (1989: 5) は未完了アスペクトを舞台レベルの中に分類しているが、現場視点という場面と結び付いた要素を持っているからには、当然のことである。

8. 日本語古語「けり」の基本的意味

山口明穂 (2000: 第6章) は古語の時の助動詞「けり」の基本的な意味についての考察である。まずその代表的な用法を総覧してみよう。各用例の末尾にその文脈での具体義を略記する。すべて山口(2000)からのものである。

- (1) 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。(竹取物語、かぐや姫) [伝承回想]
- (2) 田子の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りけり。(万葉集、3: 318、赤人) [詠嘆]
- (3) 妹として二人作りしわが山斎(やま)は木高く繁くなりけるかも。(万葉集、3: 452、旅人) [現在]
- (4) 緑なる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける。(古今集、秋下、245、読み人しらず。)[過去と現状を共に言い表す]
- (5) 式部卿宮、明けん年ぞ五十になり給ひける。(源氏物語、乙女) [未来(山岸徳平)]

「けり」の基本的意味についての諸説の代表的なものは、次の三つである。

細江逸記：伝承回想 (細江逸記、1932: 137)

山田孝雄：現に見る事に基づきて回想する意。(山田孝雄、1922: 160)

山口明穂：過去の事態を思い起こし、それを現在につなげる。(山口明穂、2000: 169)

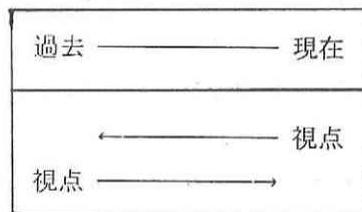
山口説は、過去の二説が不十分であるとして、新しく提出されたものであるが、上の諸用法を見るならば、山口説も十分に納得の行くものとは言いがたい。(1)の伝承回想は明ら

かに現在から過去を振り返る場合であり、(2)の詠嘆も現況への感嘆が出発点になっていると言えよう。上の五つの用法に見られるような、時間的に過去から現在にまたがる意味を分析するのに、従来のように表面的な時間軸だけを見ていたのでは解決は難しいと思われる。上の三説をよく見ると、それぞれ一部の用法には妥当であるが、全体を説明するに至らないことが分かる。それは、解決にはまったくレベルの異なった見方をする必要があるのであることを示唆している。そこで、認知意味論の立場に立って、語義以前、つまり前言語的 (prelinguistic) な認知のレベルまで戻ってみよう。このレベルでの考察の対象を「認知対象 (cognitum)」と呼ぶことにするが、これは一般にスキーマと呼ばれているものに近いであろう。

「けり」の認知対象として意識されるのは「過去から現在におよぶ時間帯」であると仮定する。これ自体には方向性 (perspective) も特定の部分の焦点化 (focal attention) も含まれていない。そういう変容が加えられるのは言語化のレベルにおいてである。上に示した3つの説は、言語化のレベルにおける方向性の捉え方の違いによるものと見ることが出来る。このような事情を図示すれば次のようになる。

「けり」の認知対象

細江説、山田説
山口説



このように考えれば、用例(4)のように、過去と現在の全体にまたがって視野にいれていて、どちらの方向性も含まれていない場合も自然に説明することができる。(5)のような未来への広がりを含む用法は、過去から現在に及んできた心的視線が未来にはみ出たものと考えることができる。

「けり」や現代語の「る・た・ている」などのアスペクト的把握を示す語は時間の流れにさまざまな心的な把握のし方を加えるわけであるが、これは、具体的な物の形が心的把握のし方によってさまざまに異なって認知されることと軌を一にするものである。

【付記】本論文は2000年12月2日に神戸市で開かれた「日本語用論学会」のシンポジウムのために用意した「場面と意味—場面と視点と焦点—」と題する講演資料に加筆修正をほどこしたものである。

【参考文献】

- 細江逸記 1932. 『動詞時制の研究』、泰文堂。
池上嘉彦 2000. 『「日本語論」への招待』、講談社。

- 菊地康人 2000. 「『のだ(んです)』の本質」、『東京大学留学生センター紀要』第10号。
- 国広哲弥 1967. 『構造的意味論—日英両語対照研究—』、三省堂。
- 1982a. 『意味論の方法』、大修館書店。
- 1982b. 「テンス・アスペクト 日本語・英語」、『講座日本語学 11 外国語との対照 II』、明治書院。
- 1984. 「『のだ』の意義素覚え書」、『東京大学言語学論集'84』、東京大学文学部言語学研究室。
- 1992. 「『のだ』から『のに』・『ので』へ——『の』の共通性」、『日本語研究と日本語教育』、名古屋大学出版会。
- 1997. 『理想の国語辞典』、大修館書店。
- 三上 章 1972. 『現代語法序説—シンタクスの試み—』、くろしお出版。
- 佐治圭三 1991. 『日本語の文法の研究』、ひつじ書房。
- 1999. 「『のだ』への補説」、『無差』第6号、京都外国語大学日本語科。
- 田野村忠温 1990. 『現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法—』、和泉書院。
- 山口明徳 2000. 『日本語を考える』、東京大学出版会。
- 山田孝雄 1922. 『日本文法講義』、宝文館。

- Bennet, T. J. A. 1972. *Two Thousand Sentences of British English*. Unpublished.
- Carlson, G. 1977. 'Reference to Kinds in English.' Ph. D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Diesing, Molly 1992. *Indefinites*. The MIT Press.
- Frei, Henri 1952. *Le livre de deux mille phrases de Paris*. Librairie Droz, Genève.
- 1971. 『日本語二千文』、早稲田大学語学教育研究所。
- Kratzer, Angelika 1989. *Stage-Level and Individual-Level Predicates*. NSF Grant Report, Department of Linguistics, University of Massachusetts, Amherst.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol. The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Quirk, Randolph et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sweetser, Eve E. ・澤田治美(訳) 2000. 『認知意味論の展開—語源学から語用論まで—』、研究社。
- Twaddell, W. F. 1965. *The English Verb Auxiliaries*. Second Edition, Brown University Press.